汪兆銘の“清郷”視察

一九四一年九月

はじめに

一九四〇年三月、汪兆銘を首班に南京に“還都”した“中華民国政府”は、その基盤として上海と南京との間を結ぶ滬寧線沿線と長江の間の地域を中心に掌握しようとしていた。そこは誰もが知るよう、農業を初めとして中国で最も豊かな地域であった。このため、統一戦線の軍隊と主張しながら国民党は独自の路線をとっていた中国共産党（以下“中共”）の軍隊であった新四軍も、この地域を握ろうと国民党中央の遊撃組織であった主義救国軍としばしば衝突を繰り返していた。汪政権は、しかし、こうした見物を決め込むわけにはいかなかった。それは、自明のことであるが、実際にこの地域を安定的に統治できるかどうかは治安が維持されるか否かと同義であり、一戦・反共・建国を指導理念として掲げ、重慶政権を否定するこの新四軍と重慶政権の主義救国軍との衝突にかかわるか否かは、自らの存在理由そのものにかかわるからであった。

いっぽう日本側から見れば、石濱知行が語るように、清郷工作とは一時清郷地帯だけの問題ではなく、それは全中国をふくむ中支全体の問題である。そして自身の支那事変から大東亜戦争へかけての性格の変化は、まるで複雑をきめ、かかる変化は当然に清郷工作の将来に影響を及ぼすものである。
を規定するもの」との位置付けがなされていたのである。

また、影佐競昭たちが中心となった対策や工作では、日本の政策
出馬の条件としての日本軍撤兵問題も、清郷工作が完
成すれば可能になるとの姿勢があった。こうした見方では、
日本軍の撤兵を日本陸軍中央が想定しているか否かを
関わりなく、その実現の前提条件である治安の確保はや
り追求せざるを得ず、清郷工作実施の大義名分となっている
のである。これについては、影佐自身がラバールで書き
残した覚え書きである『曾路音裏』からが、清郷工作
の眼目は彼地民衆の安居楽業を期し地域の政治、経
済、軍事等全てを支那側に委託して清郷より日本の軍隊
他の機関を撤去してこの地域に対する支那の政治的独
立を期する目的とする」としており、政権樹立の工作
の基本理念実現に関わる問題であると述べている。要するに、清郷工作の成
否が、そのまま政権の正統性の根幹に関わる問題である
ことを強調しているのである。

いっぱい、占領地区統治という観点から見て、清郷工作
は華北において展開されていた治安強化運動と同様に、
農村地域を確保するために必要のものと日本側からも認識
されていたが、それらはいずれも中央とその部隊をつ
く主要な殲滅対象と考えられており、華中で展開した清郷工作
の展開は、しばしば言われる「敵後方」における物語としてい
る。この問題は、政権樹立としての目的のために必要で
あるが、それに向けては、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
維持にとどまらず、それを土台として政権を支える微薄な
「清郷日報」においてもしばしば前年の作料と税の微減停止の指示を一面トップで報道し、民営ポスターを貼り付ける、清郷の視察に関する報道が見られ、民営ポスターは、江戸時代の旧政体を復活させたという感動を含んでいた。日付で、視察地であった清郷工事の実施は、衝撃を受けていた。清郷の問題点は、特にこの時期に顕著な点であり、民営の役割が大きかったとされる。この時期の民営の役割は、特に明治初頭の社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深め、民営の役割を理解するための社会課題に対する理解を深める。
は、観音院の西側には米原の上まで遠く、「観音院」や「観音寺」など「観音」にちなんだ名前が付く。「観音」は、観音院の西側には米原の上まで遠く、「観音院」や「観音寺」など「観音」にちなんだ名前が付く。
火锅，一种美味的料理，深受人们喜爱。火锅的种类繁多，有麻辣火锅、清汤火锅、羊肉火锅等。火锅的食材丰富，包括牛肉、羊肉、鸡肉、鱼肉等。火锅的调料多样，既有四川麻辣火锅的麻辣味，也有广东清汤火锅的清淡味。火锅的烹饪方式独特，将食材放在火锅中煮，既保留了食材的原味，又增添了火锅的香味。火锅不仅是一种美食，更是一种文化的象征。
清郷工作発展概況図

清郷工作実施地域および進行表

出所：防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦(3) 昭和16年12月まで』朝雲新聞社、1975年、420頁。

237—汪兆銘の“清郷”視察
第一期清郷工作にあたっては合計すれば数万人に上り、それにより清郷地区各県に分散していたのである。この数万だけを

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と

第一期清郷工作は、すでに述べたように中日両軍と
汪兆銘の視察

二

汪兆銘於九月六日（九月一〇日）

《清郷日報》の記事は、汪兆銘による第一次清郷実施地区視察が終了したことを初めて報道するもので、南京帰京にあたっての主席談話などができるものである。そこで、汪兆銘の行動の目的を「清郷の状況を視察し、関係者を督促し、早くに重大な使命を完成するため」と説明し、視察ルートの概略とともに視察過程を示している。「清郷日報」は、以下の通り。まず九月五日午後一点、汪兆銘より飛行機で蘇州に到着し、翌日午前には常熟に向かって視察を開始した。九月七日には、桃園鎮・白茆廃・吳県などを自動車で巡視し、九月九日蘇州より浦陽線の列車で南京に到着したこと、南京からの行き帰りの時間が長いことがわかる。まことに驚き、どこで出発したかわからない。
汪兆銘の蘇州到着

出所：『清華日報』 民國30年9月13日、2頁。

汪兆銘は、九月一日に南京で和平反共建国諸先烈記念大会を開催した際、清華工作は一時的な安逸ではなく、中日永久の親睦であり、東亜の永久平和である。

六月午後二時、一時間のフライトの後蘇州に到着し、飛行機で関係者の歓迎を受けた。その後、汪兆銘一行は市内十数箇所にあった清華委員会駐蘇州弁事処へ向かった。そこで幹部全員の出席が望まれる事実である。我々の言う和平とは一時的な安逸ではない。

中日永久の親睦の意義は、東亜の永久平和である。

まず、中日永久の親睦であり、東亜の永久平和である。

我々が常々言うように中国を愛し、日本を愛し、東亜の永久平和を望む。
―第1に貪官汚吏を徹底的に排除することである。清郷は、清廉な官吏によって初めて担当されるものである。参議院はどういうものであっても、裁き高ぶって荒っぽい将兵を排除し、精良なる将兵とすることがである。地方行政を確実に掌握するための基本であるが、これも具体性があると。

さて、さらにもう一つ重要なことにあるという。それは、清郷を行うにはまず清心なければならない。我々に感化されるのでなければ、普通していることができる。

清郷の行いによっては必ず清心せねばならない。我々に感化されるのでなければ、普通していることができる。
略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略

略
小 結

汪兆銘が南京で記者会見を開き、清郷庁の成果を語ったが、九月一日、同じく清郷地区を取材してきた日本軍報道部に各紙の記者十人ほどが蘇州に着いた。これは、第一期清郷が完了し、汪兆銘の清郷地区視察が行われた時期に『清郷地区内の共産剣減効果と所得と人民が享受する清郷後の福利と生活状況を見るため』に組織されたものである。

清郷後の福利と生活状況を見るため、清郷委員会駐蘇弁事処、清郷宣伝委員会、清郷日報代めで、清郷委員会駐蘇弁事処、江蘇省清郷宣伝委員会、清郷日報代表などの歓迎を受けた後、清郷宣伝委員会、清郷日報代採用程度の雰囲気を醸し出していた。
ことは同様であり、記者団の報告がまでは結果ありきの文章除けではある。
清郷工作は軍事力によって反対勢力を排除し、その地に安定的な政権基盤を築くことが目的であり、その意味では一九四一年夏に行われた蘇南地区での第一期清郷工作が成功を収めた様子を広く知らしめる必要が、汪政権にはあった。しかし、汪兆銘自身の訓説などを見るに、相手が清郷委員会駐蘇弁事処の幹部である常熟の民衆である、かななり観念的な言葉の羅列になっている。彼の言葉がどれほど蘇州や常熟の人びとに届いたのかも、『清郷日報』の記事からで、便乗を受けての標語に過ぎなかったが、よく読むとそれは掲示された標語に過ぎなかった、型にはまった表現であった。と、表面にとどまっていることが感じとれる。汪兆銘が清郷委員会委員長として、政府主席として清郷工作が実施された地域を視察することは、清郷工作の宣伝を行うことも必要であったからであり、視察は目的ではなく手段であることは、初めにあげたように報道が行われることから見ても、妥当な判断であるといえよう。

『清郷日報』から読みとれる清郷工作的の動態は、宣伝活動が守ろうとする「和平」と民の「安居楽業」の価値を説き出すことである。しかし、言葉は別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようとした汪兆銘の姿があった。もちろん、その言葉は空回りしがちである。しかし、言葉とは別に、汪兆銘自身が全人びとの支持を確認しようと
私の支那紀行「清郷を往く」（文体社、一九三四）は、清郷を訪れて行った観察と体験を基にした書籍です。著者は、日本の政治、経済、文化の立場から支那（現在の中国）の現状を客観的に分析し、清郷に対する日本の政策を批判しています。

本書は、當時の清郷生活の状況を描写し、清郷の歴史と文化を掘り下げる努力をなしています。著者は、清郷の生活環境と経済状況、政治状況を詳細に考察しており、清郷の現状を深く理解するための重要な資料となっています。

さらに、著者は、清郷を訪れるにあたり、さまざまな人々に会い、彼らの生活や意見を深く聞き取り、その声を本書に反映しているのも本書の特徴です。
清郷日報
民国三〇年八月二十七日 一頁

清郷日報
民国三〇年八月二十八日 一頁

清郷日報
民国三〇年八月二十九日 一頁

清郷日報
民国三〇年八月三〇日 一頁

清郷日報
民国三〇年九月一日 一頁
この出典は東京院華中統報部『新四軍・関東部隊』調査報告書（昭和二六年五月四日）、二十八頁であり、この点は正確に記述されているが、引用部分そのものが当原資料においても他の文献あるいは情報から引用したことが示されており、これらの情報は信頼性に乏しいものである。このため、引用部分の仕方は、出典としての史料では地元の文献と同様、自前の見解としている。しかも、『新四軍・関東部隊』調査報告書（昭和二七年）によると、この出典としての史料は、当原資料では地元の文献と同様、自前の見解としている。また、『新四軍・関東部隊』調査報告書（昭和二七年）によると、この出典としての史料は、当原資料では地元の文献と同様、自前の見解としている。
中日協力で得た戦果

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>数値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>遣表死体</td>
<td>232体</td>
</tr>
<tr>
<td>捕虜</td>
<td>2003人</td>
</tr>
<tr>
<td>投降者</td>
<td>766人</td>
</tr>
<tr>
<td>部品</td>
<td>10門</td>
</tr>
<tr>
<td>軽機関銃</td>
<td>10挺</td>
</tr>
<tr>
<td>步兵銃</td>
<td>479挺</td>
</tr>
<tr>
<td>步兵銃銃弾</td>
<td>3万0030発</td>
</tr>
<tr>
<td>拳銃</td>
<td>35挺</td>
</tr>
<tr>
<td>手榴弾</td>
<td>521個</td>
</tr>
<tr>
<td>法幣</td>
<td>40万元</td>
</tr>
<tr>
<td>日本側戦死死者</td>
<td>11人</td>
</tr>
<tr>
<td>日本側戦死傷者</td>
<td>9人</td>
</tr>
</tbody>
</table>

中国側清郷工作隊単独の戦果

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>数値</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>遣表死体</td>
<td>25体</td>
</tr>
<tr>
<td>捕虜</td>
<td>123人</td>
</tr>
<tr>
<td>投降者</td>
<td>21人</td>
</tr>
<tr>
<td>部品</td>
<td>50挺</td>
</tr>
<tr>
<td>軽機関銃</td>
<td>2200発</td>
</tr>
<tr>
<td>歩兵銃銃弾</td>
<td>40個</td>
</tr>
<tr>
<td>拳銃</td>
<td>7挺</td>
</tr>
<tr>
<td>手榴弾</td>
<td>721個</td>
</tr>
<tr>
<td>法幣</td>
<td>30万元</td>
</tr>
<tr>
<td>日本側戦死死者</td>
<td>7人</td>
</tr>
</tbody>
</table>

出所：『清郷日報』民国30年8月28日、1頁。
汪政権が日本よりの立場に立っているとは、当然として、
日米関係の好転を望みつつ推移を見守っている様子が
うかがわれる。

段落では「階級」とあるが意味が通じないので、「階
段の誤植と判断した。

【注解】

1. 原文は「階級」とあるが意味が通じないので、「階段の誤植と判断した。」
2. 汪政権の宣伝活動の一環として重要な問題であるので、別稿を用意した。